

北斎作『怒涛図』の鑑賞(中学2年生)―崇高感と領帯的特性の感受を中心に―

立原慶一

安彦文平

生徒は一方(21名)で、作品の鑑賞において『怒涛図』が崇高感をもたらすものとして賞賛し、また他方(16名)で、精神性の希薄さや沈滞感に覆われている、と批難している。造形的な特徴から感受された評価的事実を根拠として、価値判断を行ったのである。『神奈川冲浪裏』を参考として本絵と比較する場面では、前者が「力学的崇高」、後者が「数学的崇高」であると知的・概念的に自覚しないまでも、生徒は性格が互いに異なることを、感性的に認識することができた。さらに両者を比較することによって、『神奈川冲浪裏』には精神性や思想性が込められていると感心し、絵画の芸術性を高く評価した。その基本は生徒にとっての精神的な満足度に他ならない。

「領帯的特性」とは、周知のように美的に関連付けられる個々の部分、の意味である。絵からそれを感受した生徒はほぼ高回者(4回感受)に限られた。言い換えれば、それを把握するためには美的能力の高度さが求められるのである。本絵における美的な関連付けとは、とくに美的秩序としての対比を創出することに集約され、その把握は「1. 形態」、「2. 明暗・色づかい」、「3. 形態及び明暗・色づかい」の各造形領域でそれぞれ独自になされた。3は高位者、1と2は中位者によって主に感受された。

「領帯的特性 33名」を把握した生徒が、同時に捉えた基本的(一次的)美的特性の中で目立って多いのは、「躍動感 28名」と「現実感 25名」である。これら3項目の連携的な感受法のあり方に着目しつつ、この三者把握体制からなる望ましい鑑賞体験のあり方を、基準に逆算してみよう。第一に領帯的特性未感受者には、その拠り所である造形的特徴をしっかりと、視覚的に知覚させる。第二にそれから得られるべき、この「躍動感」と「現実感」の感じ方を引き出し、それぞれじっくりと味わわせるのである。かくて彼らが非美的なあり方と、美的なあり方の違いからなる二段階を踏んで、「領帯的特性」に気づくことが期待される。

対比の美的秩序をいきなり提示して、知識として与えるのは簡単である。そうするのではなく、躍動感の根拠として、造形的特徴のレベルにある回転や上下の運動、振動にまず着目させる。さらに渦巻としぶき波の形態化及び色づかいの仕方は波濤の実際を刻印づけるが、それら知覚特性レベルにおける違いに目を留めさせる。教師はこの非美的な視覚体制を意識したうえで、未感受者を「領帯的特性」としての対比美の、感性的把握へと引き入れることが大切となろう。